

『勇ましき高尚』 ～ “よき人生” を過ごす糧 ～

筆者は、理事長を務める恵泉女学園の【恵泉女学園大学、恵泉女学園大学大学院(2024年3月12日)、恵泉女学園高等学校(3月14日)、恵泉女学園中学校(3月15日)の卒業式】に赴いた。『卒業生の真摯な姿に心が慰められた卒業式』となった。若き日に【『夕闇に飛び立つミネルバの梟』(ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel:1770-1831) VS 『朝方に舞い上がるミネルバの梟』の違い】を学んだのが鮮明に思い出された。

筆者は、小学校の卒業式で来賓が話された『ボーイズ・ビー・アンビシャス』(boys be ambitious)(1877年 札幌農学校のウィリアム・スミス・クラーク William Smith Clark:1826-1886) 博士の言葉)が胸に染み入り、希望が灯るような思いを受けたものである(添付)。筆者の人生の起点であると言っても過言ではない。札幌農学校におけるクラーク精神が、内村鑑三(1861-1930)と新渡戸稲造(1862 -1933)へと導かれ、英文で書かれた『代表的日本人』(内村鑑三)と『武士道』(新渡戸稲造)は、若き日から筆者の座右の書となった(添付)。2007年からこの2冊の本の読書会を毎月継続的に行なっている。【『人生邂逅』の『非連続性の連続性』】である。『すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています』(ローマ人への手紙8章28節)の体験である。

恵泉女学園の創始者河井道(1877-1953)は新渡戸稲造の弟子のひとりで、彼女は『わたしのランターン』という著書の中で、【前向きで、前進的であること】を信条として掲げている。筆者は、内村鑑三の『後世への最大遺物』から学んだ【大いなる人物というのは、収穫物というのは、存命中に実を結んだものだけではない。故に後世に生まれた我々がこれを『温故』し『創新』することによって現代に貢献できる。これは『勇ましき高尚なる生涯』である。『勇ましき高尚』の『高尚』とは、人のために、我を忘れてやるものが高尚であり、『勇ましき』というのはイエスかノーかをはっきり言えることであろう。】が思い出された。

卒業式の意義は、【どんな人でも直面する悩みや悲しみを癒し、苦難や逆境を乗り越え、“よき人生”を過ごす糧を与えてくれるものである。】であろう！

